10/6/2008

日本・アジアのキリスト教（演習・Seminar）

＜後期オリエンテーション＞

Ａ：日程・場所

演習日（後期）：10/6, 20, 27, 11/10, 17, 12/1, 8, 1/5　（7回）

場所：第2演習室（新館2階）

Ｂ：テキスト

波多野精一　『基督教の起源』（『波多野精一全集2』 岩波書店、岩波文庫）

Ｃ：前期のまとめと後期への導入

（1）前期のまとめ

1．『西洋哲学史要』（1901）

Ａ．西洋哲学史研究者としての波多野

・近代ドイツの哲学史研究に依拠

・アリストテレスとカントを軸に哲学史を構想

これは、なぜか。

古代／中世／近世（カント以前とカント以降→）

・哲学史をまとまったマクロな動向において捉える。そのまとまりの中で、個々の哲学家の思想的特徴を示し、体系的な説明へ進む。

「デーモクリトスよりアリストテレースに至るまで史家が希臘哲学史における組織時代と称する者なり」

「アリストテレース以降の希臘哲学」「個人処世の教なり、即ち個人倫理なり。さてこの倫理時代に属する者は、ストア学派、エピクロス学派、懐疑学派の三なり。個人倫理が其の目的を達する能わざるに及んで、哲学は後終に宗教時代に入るに至れり」

「ニカイヤ会議以後の時代」「教会の信仰は神が基督によりて人類を救うという事実を中心となす。神、基督及び人類は実に教会信仰の三大要素なり」

「第一問題は、三位一体説によりて、第二問題は神人説によりて、第三問題は原罪及び神恩の説によりて決定せられたり」「第一問題はニカイヤ会議に於てアタナーシウスの提出したる説に決定せり」「第二問題はエフェソス及びカルゲドンの諸会議を経て」「第三問題の解決を試みたるは吾等が将に論ぜんとしつつあるアウグスティーヌスなり」

「ライプニッツ」「彼はデカルト及びスピノーザと同じく実体は何ぞとの問題を発しむ。以為らく。デカルトは実体を自存するものとなししかば、其の論理的帰結としてついにスピノーザの万有神教を産み、神は自然、即ち意志も智力もなき盲力、に同じとせらるるに至りぬ」

↓

哲学・哲学史自体の幅の広さ。宗教思想は哲学史の中に一定の有機的連関の内に

位置付けられる。波多野において、哲学と神学とはいかなる関係にあるのか。
キリスト教研究の方法論の問題。

Ｂ．ユダヤ教あるいはキリスト教の位置付け

(1) 古代世界自体の展開において

「基督教の宗教的世界主義（パウロによって宣伝せられし「異邦的基督教」）が破竹の勢を以て伝播せしも亦ローマ帝国の統一ありしに由ってなり」

「今や世人は己が内に存する霊と肉との矛盾を自覚せざるを得ざるに至れり。安心立命の境涯に達せんには、何より先に己れ―不善、不美、不完全の己れより全く自由とならざるべからず」「希臘の思想界は今や倫理時代を去りて宗教時代に入りしなり。古代の思想界はもはや疲れ果てぬ」

「フィローンの哲学は又「アレクサンドレイアの宗教哲学」として知らる」「（後基督教の神学の重要なる部分をなすに至りし、神と世界殊に人間との媒介者としてのロゴスという思想は全くフィローンより伝わりし者なり）」

「プロティーノスはフィローンの問題を継承し」

(2) 中世哲学史：「中世の哲学は厳密にいえばスコラ哲学にて、教会史に於て教父時代と称せらるる時代の哲学は古代史に属すべき者なれど、今は叙述の便宜上両者を合せて中世哲学として論じることとせり」

「希臘哲学の後期に於て現われたる宗教が学者の宗教なるに反して、基督教は純然たる人民の宗教なりき」「貧しき者罪ある者赤子の宗教」「イエスの福音」「基督教第一の神学者と称せらるるはパウロなり」

「基督教教義の組織は第二世紀以後着々其の歩を進めしが、其はハルナックのいえる如く、実に福音の地盤における希臘的精神の事業なりしなり。キリスト教の神学は元究理心より出でし者にして而も其が使用せし思想や概念は主として希臘哲学に取れる者なりしなり」

「ニカイヤ会議以前には大体に於て二の傾向あり。一は弁護的他は組織的なり。護教家は第一に属し、グノスティック派及びアレクサンドレイアの教校は第二に属す」

「グロスティック派は始めて基督教を哲学的に組織せんと試みし人々なり」

「オリゲネス」「後者の哲学的基礎は彼に於て完成の域に達したりというべきなり」

「基督教会の教義は教父時代に於て略々完成の域に達せり。次に起れる哲学の職分は其の教義を説明し論証し其に体系の形を与えんとするに在り。換言すれば教会の信仰を変じて教会の学問たらしむるに在り」「スコラ哲学」「信仰と理性（道理）との一致を示すに在り」

「教会は三位の一体を教う、即ち父と子と聖霊とを一の神に合一する共通の本質（普遍性）の実在性を教う。若し普遍にして実在ならざらんか一神教は変じて三神教即ち多神教とならざるを得ざるなり」「スコラ哲学が実在論を執りしは」「自然はますます神より遠ざかりてむしろ彼に反対するの傾向を呈するに至りぬ。スコラ哲学の破滅を来すべき、是の如き傾向を食い止めんが為めには教会は神と自然とは互いに一致する者なるを示さざるべからず。即ち神を以て自然の根元とも目的ともあんす自然哲学を有せざるべからず。是の如き神学的自然哲学はアリス

トテーレスの提供する所なり」「アリストテーレスは道理上の唯一の権威として正統異端の判別の唯一の標準をなすに至りぬ」

「オッカム」「宗教上の事は理性を以て証明すべきに非ず、須らく教会の教権に従いて信仰すべきなり。是に於てか信仰と理性とは全く分離しスコラ哲学は瓦解したるなり」「教会と国家との関係も亦信仰と知との如くならざるべからず。教会は国家の上に位して其を完うする者に非ずして全く其の権力範囲を異にする者なり。されば決して世間を治むべき政権に干渉すべからず」「正教の分離」「経験論の先駆」

(3) 近代への移行は簡略、特徴的議論

「希臘的精神の復活」「人間的世間的なる新人文の勃興」

「神秘派」「ルッテルは神秘説の影響を受くる頗る大なりき」「新しき人間になる」

「信ずとは生れ更るの謂なり」

「伊太利自然哲学」

「先ず新時代の幕開きせるは伊太利と独逸との両国なるが」

「今近世哲学第一期（カント以前）を通観するに、二個の異なりたる源より発し相並び走れる二個の異なれる思想の流れあり」

２.「カントの宗教哲学について」（1913 年）

カントの宗教哲学は批判的実在論と解しうるか？

・新カント学派におけるカント解釈とその問題

カントの宗教哲学の中心概念は、知識と信仰との関係、学問としての形而上学の不可能性を説明し、道徳的意識にもとづいた信仰を主張した。これは、唯物論への救助策としては意味があったが、認識論から見れば消極的帰結、宗教哲学としては部分的な議論に過ぎない。

・「時代は変わってきた」、哲学の復権、イデアリスムスの積極的評価の可能性

・根本問題は、宗教の真理問題である。その方法が超越論的方法、超越論的弁証論。

心理的研究（経験的心理学）ではなく、価値問題真理問題。

表象の内容に真理性を与え、真の認識と称する価値あるものとするものは何か。

↓

真理の規範としての範疇（認識を認識たらしめる原理、表象の認識としての価値を批判する基準）

↓

意識の根底においてこのような規範を自ら立て、その規範に従って真理を産出する能力＝理性が存在しなければならない。認識だけでなく人間の諸活動のあらゆる方面においてこの理性が存在する。

1) 真理は理性（規範を産出し与えられた材料においてそれを実現する力）の自己主張である。理性は主客を超越し包括する。自己のうちより真理の世界を産出する

創造的主観の発見

2) 永遠の真理の世界、絶対の価値の世界を主張したが、その認識は主観より離れて存在する実在は模写ではない。批判哲学の形成。

3) 真理の世界は規範の世界、理想の世界であり、実現されねばならない。そのためには材料が与えられねばならない。理性は理性以外のものを俟ってはじめて自己を完成する。精神的内容の具体的形成としての人間の歴史的生活は、重大な意義を有する。

・宗教の根本的真理内容（その最上規範）は、道徳的理性・義務を神の命令・絶対定期実在の発現として認識すること。これが歴史的宗教の価値を批判する基準となる。

宗教の真理性の証明は、宗教の根本内容が理性の自己主張の欠くべからざる要素であることを示す以外にない。道徳的理性は自己の完全なる実現を要求し、それは与えられた材料（内的自然と外的自然）においてのみ行われる。

↓

自然と理性は根本において一でなければならない。理性が万有の最深最奥の実在の発現。

自己実現を主張する理性は自己を絶対的実在の発現（＝宗教）と認めずにはいられぬ。

↓

宗教は、自ら産出することのでない材料において、個性をそなえた生きた具体的な形で実現される。この実現の手段が象徴。理性宗教は歴史的宗教の象徴（教会、礼拝、祈祷、サクラメントなど）を正し浄めこそすれ、斥け否定はしない。象徴は方便ではなく、人間として必然的な実現の形式である。理神論とは違う。

宗教的人格の深い経験に発し歴史の舞台に活躍する宗教を理解し、その真理内容を明らかにし、その自己の本質・規範・理想の自覚を与える哲学という意味での宗教哲学は、カントに始まる。

・欠点

1) 生きた具体的宗教真理内容としてはカントの宗教概念は狭い。宗教は道徳の付属物となる傾向。

理性の全体を統一的に考察する必要。

『判断力批判』における反省的判断力（理論理性と実践理性の中間にあって両者を結びつける能力）とその規範としての「自然の合目的性」概念

知識を構成する特殊な内容は理性が作り出すものではない、しかもその特殊の内容が知識能力の要求と一致しうるものでなければならない。

自然は人間の知識能力の目的にかなったものと判断されねばならない。

cf. 神の創造という点において確保される、自然の法則性（ロゴス）と人間の認識能力（ロゴス）との合致　→　自然神学

↓

道徳の完全なる実現を自然及び歴史の終極の目的とする目的論的世界観

以上から、

宗教は理性全体の要求。理性の一切の規範、全人格の精神的内容を絶対的実

在の発見と見なす宗教概念が得られたはず。しかし、カントはそこまで徹底しなかった。

カントが啓蒙時代の宗教哲学の影響を完全に脱しきれなかったため。

理神論（道徳の立場より宗教を見る）の遺物

2) Ding an Sich の問題性。

超感覚的対象の経験において認識することの不可能性を帰結。

超感覚的世界との直接の交通接触を意味したり、あるいは機械的因果を超越してたりしているような内容は、完全に排斥されねばならない。

これは、最高実在の直接の現在という宗教の根本内容・根本要求と対立

Ding an Sich 説は、真理の模写説との関わり（模写説は否定するが、対象の実在は確保するという「気分」）で導入された。物自体は、人間の生が実在最深の本質に根ざしているという形而上学的意味においてのみ、許容すべきである。

3) 機械的因果と自由との対立。

啓蒙時代の数学的物理学の影響を脱していない

↓

理性概念によるこの欠点の克服

理性は自然的因果の産物ではない、自らが法則を産出する活動（自律的で自由な活動）。自由は超感覚的な本体界に属する、理性の事実。

カントの宗教哲学はカント哲学の根本精神の産物であり、その根本精神は、理性すなわち永遠の真理の世界の自己主張に基づいた自覚である。

真理の可能自体は、信ずべきこと、主張すべきことで、証明すべきことではない（独断論）。理性を主張し真理の世界に身を投じる決心と勇気が哲学には必要である。

（２）後期への導入

「歴史の意義に関して　ギリシア思想とヘブライ思想と」（1922 年）

有賀鐵太郎のハヤ・オントロギアの視点の先取り

西洋思想史についての基本的視点と、それに基づく宗教哲学

イデアリスムスの意義とその徹底化、人格性と象徴・歴史

１．ヨーロッパ文化に極めて深き影響を及ぼし、其の成立の基礎を置くに与つて最も力あつた古代の二の民族、ギリシア人とヘブライ人

一九世紀以来歴史学

歴史的生活の意義の存在を初めより前提しつつ論題の考察に向ふ

２．ギリシア人

ギリシア思想の反歴史的態度の主なる原因又は理由

個体と変化との世界は永遠の秩序を表現又は映写して居る限りに於てのみ顧みられ論じられる価値があるに過ぎない。

phusis（自然）のみが語るべき論ずべき唯一の対象、唯一の実在

永遠の繰りへしといふ思想

プラトンのイデア説

概念の内容即ちイデアは経験に於て事実として与へられないにも拘らず、しかあるべきものの当為として経験内容を支配すること、規範又は価値

イデアを世界観の中心に置いたことに由ってプラトンは実にイデアリスム（理想主義）の祖となった

↓

歴史の中心内容が人間の体験努力行為などであり、其等は自然と区別されて文化と総称せられる存在の諸領域即ち例へば政治経済学問道徳芸術などに関係しこれ等を産出するものである以上、歴史は時に於ける変化であるに相違ないが、単に変化といふに尽きず、自然現象と異つて事実である

価値実現の過程といふ意義を有せねばならぬ

時や所やすべての関係を超越して其自身に於て妥当する永遠の価値にまで進み達せねばならぬであろう。

盲目的運動でも単に同一事の繰返へしでもなく

新なる生命を表現し、而してかくの如き実在及び変化は相関連し連続して少くも理想としては人類全体を包括する歴史的生活の全体即ち所謂世界史を構成するに至るのである。

↓

しかし、永遠的価値の思想は十分に貫徹されなかった。イデアと経験的世界との関係は絶えず普遍と特殊、常住と変化とのそれとして取扱はれた。

「与かる」

普遍的なものが特殊なものにおいて何らかの限定のもとに繰り返される

無際限なる無意義なる繰り返し

かかる世界においては有意義なる歴史のあり得ないのはいうまでもない

ギリシア思想は歴史の意義を解すべき原理は提供しながら歴史の意義そのものは否定した。

３．歴史の意義の肯定、有意義なる歴史の発見は、ヘブライ思想の功績

イスラエル民族の文化の心髄は宗教に存した。

預言者たち

概念的に仕上げられたる思想に出会うことは望まれない。

民族の守護神ヤーヴェは、全く新しき神に変じた、生きた人格的の神

ヤーヴェはイスラエルとの自然的関係を超越し、更に他の諸民族、否一を併合する世界的大国の運命をもわが掌中に握るものとなった。

あらゆる拘束繋累を離れて自由に行為する人格的実在としての神

↓

神の自由なる行為を直接に啓示するものとして、歴史的生活の意志的特質と其の内容の本来の具体性を保存しながら、人の全き興味を占領し得るものとなった

歴史はもはや特定の民族又は国家に限界及至標準を有する比較的に私的なる事

件ではあり得ない。諸の民族諸の国家は共通の力に支配され共通の運命に出会うが故に、歴史は包括的普遍的意義を有する天下公の事柄となる。

正義を欲する神

神の道徳的意志の実現

イスラエルをアッシリアやバビロンの懲戒に委ねたのが神の正義であった如く、今やキュロスを使役して其を救済するも亦同じ正義の働き

イスラエルの特権には同時に特異な責任と任務とを伴う

ヤーヴェの僕

倫理的一神教はかくして歴史の意義の考察より生まれた

共通の目的に向ふ諸民族の共同の歴史といふ観念、又その歴史の終極の意義の意識も

４．キリスト教の思想の基礎

キリスト教においてはユダヤ人特有の民族中心主義は全く跡を絶ち純然たる世界主義が行われる。世界歴史の目的がキリストの出現と共に少くも原則に於ては実現を見たと信ぜられたこと

両種の思想は本来互に相補はるべきもの

ヘブライ思想は歴史の意義を力強く肯定したものの概念的明確を以て理解し又は言表はす手段を欠いた。しかるに他方に於てギリシア人は「ロゴス」の概念に於て世界の本質として従って自然並に人間界の出来事を支配する原理としての理性の思想を有しながら、つひに歴史の意義の否定に終始した。

これ等両種の思想の接近及び結合は、一般文化史一般思想史の見地よりはいふに及ばず、歴史の意義の肯定及び理解といふ吾々の論題より見るも極めて重要なる興味深き歴史的事実といふべきである。

アレキサンドロス、ヘレニスティク文化の地盤に於て、ローマの成就した世界統一に助けられつつギリシア思想とヘブライ思想とはつひに結合を遂げた。

アレキサンドリアのユダヤ人フィロンの「ロゴス」説、ヨハネ伝福音書

ギリシア哲学とキリスト教との融合といふ文化史上重大なる意義を有する事情に着手したのは普通「教父」といふ名にて呼ばれる人々である。

↓

ヘレニズムとヘブライズムは、キリスト教において統合され、西洋世界に決定的な役割を果たした。西洋世界におけるヘレニズムとヘブライズムの二つの伝統は、キリスト教思想（神学）と哲学思想という二つの思惟の流れを生み出しつつ、現代に至っている。

↓

後期のテーマへ

波多野はいかにキリスト教を理解したか？

哲学的思惟との関わりは？

↓

次年度以降：波多野は、以上の考察を基盤に、いかなる宗教哲学を構築しようとしたのか？